

【共同研究】

# 女子大学生の情緒的摂食にいたる、 母子相互作用およびストレスコーピングとは

田中 志帆\* 森下 春枝\*\* 功刀 梢\*\*\*

## The Effect of Coping Strategies and Mother-child Mealtime Interaction on Emotional Eating among Female College Students

Shiho TANAKA, Harue MORISHITA, Kozue KUNUGI

The aim of the current study was to examine the effects of coping strategies and mother-child mealtime interaction on emotional eating. The sample consisted of 590 female junior college students. Participants completed a self-report to assess coping style (TAC-24), an emotional eating scale (EES), and a mother-child interaction in mealtime scale (MCIM). The results were as follows: (1) The image of mother as controlling and coercive during meal times, before the age of 18 was positive correlated with the coping style of buck-passing. (2) Cluster analysis revealed 5 subtypes on back ground of emotional eating, including BMI, the absence of the mother at mealtimes, and dissatisfaction with one's weight. (3) Cluster 2 (the greatest sensitivity to demands, a highly controlling and coercive mother during meals, the coping style is avoidance, and diverting reation) and cluster 4 (the image of mother as the most controlling and coercive during meals and the coping style is buck-passing) were related to emotional eating tendencies.

**Key words** : binge eating, emotional eating, mother-child mealtime interaction, stress coping  
過食、気晴らし食い、食事場面における母子交流、ストレスコーピング

### 1. 問題と目的

Bruch (1978/岡部・溝口, 1979) は、摂食障害を、食事場面の親子の要求と供給のサインがかみ合わないことで、子どもが食欲を含む自身の内的な欲求に気が付かずに成長すると、思春期を迎えた時に、食行動の異常(拒食・過食)をもって自立をなしとげようとするあり方であると述べている。乳幼児期での食事の癖や偏食、特に離乳段

階での母子のコミュニケーションの齟齬が、青年期に過食症を引き起こす可能性が指摘されており(March&Cohen, 1990)、アタッチメント研究からもインファンタイル・アノレキシアの幼児と母親の相互作用の研究において、母親側の独断で食事が終わり、中断されるという観察状況が示されている(Drotar, Eckerle, Satola&Wyatt, 1990 ; Sanders, Patel, LeGrice&Shephard, 1993)。食事を巡る親と子のコミュニケーションや家族の在り方を検討することは、摂食障害を理解する上で重要であると考えられる。

田中 (2003, 2010) は、幼少期から青年期に至るまでに根づいた食事を巡る内的対象イメージが、青年期の摂食障害傾向と関連することを想定

\* たなか しほ 文教大学人間科学部人間科学科

\*\* もりした はるえ 青山学院女子短期大学現代教養学科

\*\*\* くぬぎ こずえ 青山学院女子短期大学非常勤講師

し、食事場面での両親の行動尺度を作成し検討を重ねてきた。その結果、食事場面での母親の支配的、強制的な態度やイメージが、摂食障害傾向に影響を及ぼしている可能性が示唆された。さらにネガティブ感情に対処・反応する食行動を媒介として、食事に支配的である母親イメージが、やせ願望や過食傾向に影響を及ぼしていた。また子どもの要求を察知する母親イメージが、動揺や恐怖感情に反応した食行動を抑制していた。ネガティブ感情に対処する食行動は、食事を巡る親子のコミュニケーションが関与していることが推測される。

ちなみに、ネガティブ感情に対処し情動制御を目的とした食行動を、emotional eating (情緒的摂食)<sup>1)</sup> というが、この概念は、Bruch (1964) の情動の喚起と空腹の感覚の区別がつかないことで、ネガティブ感情に対処する際に食行動で反応するという考察に基づいている (Hong, Taisheng&Gui, 2013)。Emotional eatingについては、Masheb&Grilo (2006) が作成したEmotional Overeating QuestionnaireやArnow, Kenardy&Agras (1995) が作成したEmotional Eating Scale (EES) がある。EESは子どもから青年まで適用可であることが確認されている (Tanofsky, Theim, Yanovski, Bassett, Burns, Ranzenhofer, Glasofer&Yanovski, 2007)。ネガティブな情動に対するemotional eatingは通常、悔恨や抑うつ感とともに大量の食物を強迫的に摂取する心因性過食 (気晴らし食い) のあり方と密接にかかわっている。臨床的にも、前述のように母子関係のコミュニケーションの課題が気晴らし食いに至る重要な要因であることは、以前から指摘されている (遠山・馬場, 1991)。Taube-Shiff, Exan, Tanaka, Wunk, Hawa&Sockalingam (2015) は、肥満患者を対象にアタッチメントスタイルとEESとの関連を検討し、Anxious (不安型) アタッチメントは、怒りの感情に対処する食行動に直接的にも間接的にも影響を及ぼしていると述べている。そして高Avoidant (回避型) のアタッチメントスタイルはEESの不安感情対処摂食と抑うつ対処摂食を抑制する一方、感情コントロール変数を媒介すると情緒的摂食に影響を及ぼす複雑さを示していて、さらなる検討が必要であるとし

ている。

一方、認知的な観点では、気晴らし食いや過食は、ストレスコーピングに偏りがあること、あるいはコーピングへの自己効力感が低いために生じると説明されている (Bennett&Cooper, 1999)。しかし、ストレス状況の多様性やストレスコーピング概念の定義が統一されていないため、コーピングの測定に関しても、未だ統一的な見解や方法がとられていない課題がある。コーピング研究でよく用いられるのは、Folkman&Lazarus (1985) の作成したWay of Coping, Holahan&Moos (1987) の、積極型と回避型にコーピングの次元を2分化した尺度である。さらに、ストレスや問題に対する回避的なコーピングについて、不適応的なものとする立場と (Holahan&Moos, 1987)、適応的であるとするLazarusらの見解とが分かれている。

そのストレスに対する回避的コーピングは、臨床群とノンクリニカル群両方を対象にした研究で、摂食障害傾向と関連があることが報告されている (Freeman&Gil, 2004 ; Sulkowski, Dempsey & Dempsey, 2011 ; MacNeil, Esposito-Smythers, Mehlenbeck, Weismore, 2012)。例えば、MacNeil, Esposito-Smythers, et.al (2012) は、ノンクリニカル群の大学生を対象とした調査で、対象者の日常の悩み事の認知数と回避型コーピングスタイルの相乗効果が、食行動の問題に重要な影響を及ぼす要因であると主張している。対照的に、国内の研究では岡本・中津・川村 (2000) が、摂食障害患者は回避優先的な対処行動をとることが少なく、情緒優先対処行動を選択する傾向があると報告している。またEAT-26 (Garner, Olmstead, Bohr&Garfinkel, 1982) が20点以上の女子学生は、20点以下の学生よりも情緒優先対処尺度の得点が有意に高いが、回避優先及び課題優先対処尺度得点には差がなかったという (岡本・三宅・吉原, 2013)。海老原・神村・坂野 (1995) も、回避的思考や気晴らし行動が低く、計画立案、ポジティブ思考方略が高い人は、食事強迫、肥満恐怖、EAT-20の総得点が高く、摂食障害傾向があると考察している。

このように、国内の研究と海外の研究と異なる結果が見られるため、回避的なコーピング方略は

情緒的摂食と関連があるのか、さらに食事場面でのコミュニケーションや、内的な親イメージを基盤とするのかどうかを検討することは、有用であろう。そこで本研究では、回避的なコーピング方略も含めて、女子青年の食事場面での母親イメージ（認識）と、日常のストレス対処方略が加わることによって、情緒的摂食行動が生じる可能性があるのかどうかを検討することを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 調査期間・調査方法

2012年4月に実施した。A女子短期大学の新入生対象の運動能力・体力測定時、また同日に2年生以上の学生にも体力測定時に質問紙を配布、回答終了後にその場で回収した。

### (2) 調査対象者

A女子短期大学の1年生～3年生。

### (3) 調査内容

#### ①フェースシート

調査対象者の学年、高校卒業以前に同居していた家族の構成、高校を卒業するまでの食事時間帯での母親の在・不在に関する評定（4段階評定）と体重不満足度（1満足している～5不満足である、の5段階評定）、短大生活への不安（5段階評定）、現在の居住状況（実家・一人暮らし・友達あるいは兄弟と同居・その他）について問う項目で構成されている。体重と身長も自己申告での回答を求め、BMIを算出した。

#### ②質問項目群

##### ネガティブ感情に対処するための食行動の測定

Arnold, Kenardy&Agras (1995) の作成した、EES (Emotional Eating Scale: 情緒的摂食行動尺度)<sup>2)</sup> を、日本語に訳した25項目 (田中, 2010) を用いた。先行研究と同様に、「我々は、いろいろな感情に対してさまざまな方法で反応することがあります。ある種の感情は人々に食べることへと駆り立てることがあります。以下の感情を経験したら、あなたはどれくらい「食べたい」と感じるのでしょうか?」という教示で、1食べたいとは

思わない～5食べずにはいられない (5段階評定) とした。

##### 食事場面における母親の行動認識の測定

「食事場面での母親の行動認識尺度」(田中, 2010) の下位尺度の「要求察知」尺度の7項目に、新たに2項目を追加した9項目と、「支配強制」尺度に新たに3項目を追加した6項目、計15項目を用いた。いずれも5段階評定（1全然当てはまらない～5びったり当てはまる）とした。新たに追加した項目は、田中 (2003) の「食事場面での母親像尺度」から一部抜粋、修正をしたものである。

##### ストレス状況での対処方略の測定

神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野 (1995) が作成したTAC-24 (Tri-axial Coping Scale 24-item) を用いた。この尺度は、Holahan&Moos (1987) をベースに、「問題焦点—情動焦点」軸、「接近—回避」軸、「認知—行動」軸、の3軸で構成される8空間 (8因子) が抽出されることを目指し作成されている。実際、神村ら (1995)、若林 (2000) の研究において、8因子構造が確認されており、各因子は全て3項目で構成されている。先行研究では、5段階評定の頻度での評定を求めているが、ストレスの内容によりコーピングの種類や頻度は変化する可能性を考慮し、1全然当てはまらない～5びったり当てはまるとして、自身に該当するかどうかを問う5段階評定を採用した。

## 3. 結果

### (1) 調査対象者の属性および傾向

本調査対象者の平均年齢は18.38歳 ( $SD=1.98$ )。1年生が574人で、 $M=18.31$  (1.98)、2年生が7人で  $M=20.00$  (0.82)、3年生が9人で  $M=21.17$  (1.65) であった。高校卒業以前に同居していた家族は、「両親と兄弟の家族」が376人 (63.7%)、「祖父母や叔父伯母を含む多世代家族」が137人 (23.2%)、「母子・父子家族」が59人 (10.0%)、その他が9人であった。高校卒以前に主に食事を作っていた人物は、「母親」が535人 (90.7%)、「祖母」が26人 (4.4%)、「父親」が6人 (1.0%)、「回答者自身ないし全員」が6人 (1.0%)、「妹」が1人、無回答16人であった。高校を卒業するまでに、食事をす

るときに母親が側にいたかどうかについては「常に側にいた」が174人(29.5%)、「だいたい側にいた」が290人(49.2%)、「時々側にいなかった」98人(16.6%)、「全く側にいなかった」25人(4.2%)であった。体重満足度については、 $M=3.82$ (1.10)、現在の短大生活への不安は $M=2.73$ (1.00)。調査対象者のBMI(Body Mass Index)の平均値は20.19(2.23)であった。

## (2) 使用した尺度項目群の因子分析結果

### ①EES(情緒的摂食行動尺度)の因子分析

EESの全25項目について、先行研究に基づき3因子を仮定した上で、主因子法、プロマックス回転による因子分析を因子構造が安定するまで行った。結果をTable1に示す。第1因子は「狼狽する気持ちになると」「混乱する気持ちになると」「び

くびくする気持ちになると」等の項目の因子負荷量が高いこと、さらに、田中(2010)における第3因子「動揺・恐怖対処食行動」の構成項目4つがすべて本研究での第1因子に含まれていることから、「動揺・恐怖対処食行動」因子と命名した。第2因子も、先行研究での第1因子である「抑うつ対処食行動」の因子構成項目と1項目が増えただけで一致するため、同様に「抑うつ対処食行動」因子と命名した。第3因子も、先行研究の「怒り・欲求不満対処食行動」因子の構成項目と一致していたため、「怒り・欲求不満対処食行動」因子と命名した。各因子ごとに因子負荷量が0.40以上の項目の評定値を加算して、尺度得点とした。信頼性係数は、 $\alpha$ 係数=0.90~0.93となり、高い内的整合性が確認された。

Table1 Emotional Eating Scale (EES:感情からの食行動)の因子パターン行列

項目	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
<b>&lt;因子1 動揺・恐怖対処食行動&gt; <math>\alpha=0.94</math></b>				
狼狽する気持ちになると	0.88	-0.05	0.08	0.79
混乱する気持ちになると	0.80	-0.08	0.15	0.72
うんざりする気持ちになると	0.73	-0.06	0.22	0.72
くよくよする気持ちになると	0.73	0.20	-0.05	0.73
びくびくする気持ちになると	0.69	0.30	-0.18	0.70
無力感を感じる気持ちになると	0.69	0.18	0.02	0.71
自責の気持ち(罪悪感)になると	0.68	0.16	0.02	0.66
ハラハラする気持ちになると	0.55	0.25	-0.03	0.54
<b>&lt;因子2 抑うつ対処食行動&gt; <math>\alpha=0.91</math></b>				
不安な気持ちになると	-0.02	0.76	0.08	0.64
心細い気持ちになると	0.00	0.76	0.04	0.61
憂鬱な気持ちになると	0.08	0.69	0.04	0.60
がっかりした気持ちになると	0.02	0.67	-0.03	0.60
自分を無能だと思う気持ちになると	0.17	0.61	0.06	0.62
疲れ果てた気持ちになると	-0.03	0.56	0.15	0.41
悲しい気持ちになると	0.35	0.56	-0.09	0.64
孤独な寂しい気持ちになると	0.36	0.40	0.05	0.57
<b>&lt;因子3 怒り・欲求不満対処食行動&gt; <math>\alpha=0.90</math></b>				
イライラする気持ちになると	-0.28	0.22	0.92	0.78
ムカつく気持ちになると	0.05	-0.10	0.92	0.80
腹が立つ気持ちになると	-0.01	0.12	0.70	0.60
怒り狂う気持ちになると	0.30	-0.12	0.70	0.70
反発したい気持ちになると	0.20	0.00	0.58	0.52
欲求不満の気持ちになると	0.17	0.10	0.49	0.47
他の因子の影響を無視した因子寄与	4.73	3.60	3.41	
因子間相関	F2	0.75		
	F3	0.63	0.57	

②食事場面での母親の行動認識尺度の因子分析

本研究では、田中（2010）の報告においてEESを媒介にEDI（Eating Disorder Inventory ;Garner&Olmstead&Polivy, 1983）の「やせ願望」「過食」に影響を及ぼしていたのが、食事場面での母親の行動認識尺度の「要求察知」と「支配強制」であったことから、この2因子構成となるように項目を追加修正した。そこで2因子を仮定し、全15項目について主因子法、プロマックス回転での因子分析をおこなった（Table2）。第1因子は、先行研究の第1因子で因子負荷量の高い項目と一致していたので、「要求察知」と命名した。同様に、第2因子を「支配強制」と命名した。続いて因子負荷量が0.45以上の項目を因子ごとに加算して、それぞれ下位尺度得点とした。信頼性係数は、「要求察知」で $\alpha=0.88$ 、「支配強制」で $\alpha=0.83$ であり、十分な内的整合性が確認された。

③TAC-24の因子分析

全24項目について、最初に若林（2000）の方法に従い、重みなし最少2乗法（ULS法）のオブリン回転、8因子を仮定して因子分析を行ったが、初期の固有値が第5因子で1.08となり、第6因子では1以下となった。しかも、若林（2000）の報告とは因子構成項目が異なり、第7因子では因子負荷量が

0.35以上の項目が1つだけで、8因子構造にはならなかった。そこで最尤法、プロマックス回転の因子分析に変更して、8因子から1つずつ因子数を減らしながら分析を繰り返したところ、5因子で構造が安定した。適合度検定では、8因子では $\chi^2=333.71$  ( $df=112$ )、5因子では $\chi^2=722.25$  ( $df=166$ )となり、モデルの当てはまりは8因子の方がよいが、第8因子の負荷量の高い項目は1つだけであったため、因子解釈可能性も考慮し、5因子構造が妥当であると判断した（Table3）。

第1因子の負荷量が高い項目は、神村ら（1995）と若林（2000）の「責任転嫁」「放棄」の因子負荷量が高い項目と一致していた。そのため第1因子を「責任転嫁・放棄」と命名した。第2因子も、同じ先行研究の「計画立案」「情報収集」の因子負荷量が高い項目と一致していた。そこで第2因子を「計画立案・情報収集」と命名した。本研究の第3因子も、同じ先行研究の「回避的思考」「気晴らし」の2因子で、因子負荷量が高い項目と同一なので、「回避的思考・気晴らし」とした。第4因子、第5因子はいずれも負荷量が高い項目が3項目ずつで、先行研究と因子構成項目が同じであったので、第4因子を「カタルシス」、第5因子を「肯定的解釈」とした。 $\alpha$ 係数から概ね十分な内的整合性が確認された（Table3参照）。続いて因

Table2 食事場面での母親の行動認識の因子パターン行列

項目	Factor1	Factor2	共通性
<b>&lt;因子1 要求察知&gt; <math>\alpha=0.88</math></b>			
私が辛い時には、母親はおいしい食事を作ってくれたと思う	0.74	0.04	0.56
私の体が丈夫なのは、母親の料理があるからこそだと思った	0.73	0.04	0.54
「作って」と私が言うと、母親は何か食事を作ってくれると思う	0.71	-0.11	0.49
母親に「何が食べたいか？」を聞かれた時は、リクエスト通りの食事がでてきたと思う	0.70	-0.07	0.48
私がどんな時間に帰ってきても、母親はご飯を温めてくれていたと思う	0.70	-0.10	0.47
色々な種類の食事を、母親は作って出してくれたと思う	0.69	0.06	0.50
母親は私の好きな食べ物と嫌いな食べ物を知ってくれていたと思う	0.67	-0.05	0.44
母親は嫌いなものを食べやすくするように作ってくれたと思う	0.64	0.15	0.46
<b>&lt;因子2 支配強制&gt; <math>\alpha=0.83</math></b>			
私が食事を残すと、母親にしかられる気がした	0.01	0.77	0.60
嫌いなものを食べるまで、母親に席を離れるのを許されなかったと思う	0.02	0.76	0.59
母親に、私が食べ終わるまで食事を止めたりその場から動くことを許されなかったと思う	0.10	0.69	0.52
食事の時、細かいことを母親にうるさく言われていたと思う	0.01	0.65	0.42
食事の時、母親に早く食べるようにせかされていたと思う	-0.07	0.62	0.37
母親に叱られるのではないかと、食事中ドキドキしていたと思う	-0.13	0.57	0.32
他の因子の影響を無視した因子寄与	3.93	2.83	
因子間相関 F2	0.17		

Table3 TAC-24の因子分析パターン行列

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5	共通性
<b>&lt;因子1 責任転嫁・放棄&gt; <math>\alpha=0.88</math></b>						
口から出まかせを言って逃げ出す	0.83	0.03	-0.10	-0.04	0.07	0.63
自分は悪くないと言い逃れをする	0.82	-0.02	-0.17	0.05	0.19	0.62
責任を他の人に押し付ける	0.81	0.06	-0.16	-0.04	0.07	0.59
自分では手におえないと考え、放棄する	0.75	-0.02	0.19	0.05	-0.10	0.69
どうすることもできないと解決を先に延ばす	0.60	0.10	0.21	-0.03	-0.06	0.51
対処できない問題だと考え、あきらめる	0.55	-0.10	0.38	-0.02	-0.10	0.55
<b>&lt;因子2 計画立案・情報収集&gt; <math>\alpha=0.84</math></b>						
原因を検討し、どのようにしていくべきか考える	-0.10	0.72	-0.02	-0.14	0.10	0.50
どのような対策をとるべきか綿密に考える	0.06	0.71	-0.09	-0.13	0.06	0.46
詳しい人から自分に必要な情報を収集する	0.04	0.71	-0.06	0.09	-0.02	0.53
力のある人に教えを受けて解決しようとする	0.17	0.70	-0.04	0.16	-0.21	0.58
すでに経験した人から話を聞いて参考にする	0.03	0.68	0.02	0.16	-0.04	0.57
過ぎたことの反省をふまえて次にすべきことを考える	-0.13	0.58	0.25	0.14	0.16	0.52
<b>&lt;因子3 回避的思考・気晴らし&gt; <math>\alpha=0.76</math></b>						
嫌なことを頭に浮かべないようにする	-0.03	-0.06	0.75	-0.08	0.10	0.58
そのことをあまり考えないようにする	-0.01	-0.04	0.66	-0.07	0.16	0.53
無理にでも忘れようとする	0.31	0.00	0.48	-0.08	-0.02	0.40
スポーツや旅行などを楽しむ	0.03	0.13	0.44	0.09	0.08	0.35
友達とお酒を飲んだり好物を食べたりする	0.02	0.00	0.40	0.20	-0.12	0.21
買い物やおしゃべりなどで時間をつぶす	-0.07	-0.06	0.37	0.36	0.11	0.37
<b>&lt;因子4 カタルシス&gt; <math>\alpha=0.82</math></b>						
誰かに話を聞いてもらいたい気を静めようとする	-0.06	0.03	0.02	0.84	0.04	0.74
誰かに話を聞いてもらって冷静さを取り戻す	-0.14	0.07	0.08	0.76	0.01	0.66
誰かに愚痴をこぼして気持ちをほらす	0.15	-0.11	-0.11	0.73	0.08	0.50
<b>&lt;因子5 肯定的解釈&gt; <math>\alpha=0.77</math></b>						
悪いことばかりではないと楽観的に考える	0.11	-0.06	0.09	0.07	0.76	0.68
今後はよいこともあるだろうと考える	0.06	0.00	0.09	0.08	0.69	0.61
悪い面ばかりではなく良い面もみつけていく	-0.09	0.28	0.08	-0.02	0.45	0.41
他の因子の影響を無視した因子寄与	3.48	2.96	2.12	2.14	1.48	
	F2	0.08				
	F3	0.37	0.28			
	F4	0.11	0.39	0.29		
	F5	0.04	0.35	0.55	0.19	

Table4 各尺度の平均値・標準偏差と尺度間相関 (BMI、体重不満足も含む)

	動揺恐怖	抑うつ	怒り不満	要求察知	支配強制	責任転嫁	計画立案	回避的	カタル	肯定的
抑うつ	0.82 **									
怒り・欲求不満	0.68 **	0.64 **								
要求察知	-0.02	-0.03	0.01							
支配強制	0.17 **	0.14 **	0.16 **	0.15 **						
責任転嫁	0.26 **	0.27 **	0.15 **	-0.02	0.25 **					
計画立案情報	0.10 *	0.11 *	0.08	0.26 **	0.19 **	0.13 **				
回避的気晴らし	0.21 **	0.18 **	0.16 **	0.21 **	0.16 **	0.39 **	0.29 **			
カタルシス	0.05	0.06	0.13 **	0.26 **	0.02	0.09 *	0.34 **	0.33 **		
肯定的解釈	0.10 *	0.11 *	0.06	0.21 **	0.04	0.18 **	0.39 **	0.54 **	0.28 **	
BMI	0.09	0.12 **	0.11 *	0.01	-0.05	0.00	-0.05	-0.07	0.07	0.02
M	16.38	16.70	15.48	29.28	11.84	12.44	17.87	16.96	10.08	9.54
SD	7.29	7.20	6.00	7.33	5.36	5.00	5.02	4.98	3.03	2.95

\*\* $p<.01$  \* $p<.05$

子負荷量が0.35以上の項目を加算して、下位尺度得点化した。

(3) 尺度間相関

EESの「抑うつ」「怒り・欲求不満」「動揺・恐怖」、食事場面での母親の行動認識尺度の2尺度、TAC-24の5つの尺度とBMIとの相関係数(Pearsonの積率相関係数)を算出した(Table4参照)。一部の変数間に同一尺度外の下位尺度と $r=0.11\sim 0.27$ までの正の弱い相関があった。母親の行動認識尺度の「支配強制」とEESの3尺度との間には、弱い相関が認められた。「要求察知」とEESの間には相関がなかった。また、EESの「動揺・恐怖」と相関があったTAC-24の下位尺度は、「計画立案・情報収集」「回避的思考・気晴らし」「肯定的解釈」であった。EESの「抑うつ」と相関があったTAC-24の尺度は「責任転嫁・放棄」「計画立案・情報収集」「回避的思考・気晴らし」「肯定的解釈」であった。EESの「怒り・欲求不満」と相関があったのは、「責任転嫁」「回避的思考・気晴らし」「カタルシス」であった。BMIはTAC-24

と、食事場面での母親の行動認識尺度との相関はなく、EESの「抑うつ」「怒り・欲求不満」との間でのみ、相関が示された。

(4) クラスタ分析による類型化と情動統制的な摂食行動の平均値の差異

① クラスタ分析による類型化

調査対象者の高校卒業以前の食事場面における母親イメージ、またストレス対処方略とBMI、母親が食事時に実際に側にいた頻度、体重満足度という要因同士の関係を明らかにし、類型化を試みるために、母親の行動認識尺度の2尺度とTAC-24の5つの尺度、BMI、食事の時に母親がいた頻度、体重不満足度の計10の変数を投入してクラスタ分析を行った(平均ユークリッド距離・Ward法連結)。その結果、デンドログラム(Figure1)から、破線より下の5つのクラスターに分類するのが適当であると判断した。続いて、5つのクラスターごとに各投入変数の平均値の差異を検討するため、一要因分散分析を行った。独立変数群が等

Table5 クラスタごとの母親の行動認識とTAC-24、BMI等の尺度得点平均値と標準偏差(分散分析結果)

	クラスタ					F値	多重比較
	クラスタ1 N	クラスタ2	クラスタ3 69	クラスタ4 72	クラスタ5 101		
要求察知						W 232.5 *** $\eta^2$ 0.63	3<1<4<5<2
M [SD]	24.53 [5.80]	36.53 [2.86]	21.13 [4.96]	27.44 [5.18]	34.96 [3.13]		
支配強制						W 69.63 *** $\eta^2$ 0.34	3・1・5<2<4
M [SD]	9.40 [2.82]	14.29 [6.86]	8.99 [2.77]	17.47 [4.11]	9.9 [3.59]		
責任転嫁・放棄						W 51.97 *** $\eta^2$ 0.24	5・3<1・2・4
M [SD]	13.38 [5.04]	14.87 [5.73]	9.71 [3.09]	13.96 [4.29]	8.64 [2.45]		
計画立案・情報収集						W 38.77 *** $\eta^2$ 0.24	3<5・4<1<2
M [SD]	19.45 [3.99]	21.07 [5.72]	13.38 [3.74]	17.38 [3.64]	16.79 [4.52]		
回避的思考・気晴らし						W 63.72 *** $\eta^2$ 0.32	5<1 3<5・4<2
M [SD]	17.62 [4.82]	21.54 [4.25]	12.46 [3.39]	16.10 [4.09]	15.3 [3.93]		
カタルシス						W 22.86 *** $\eta^2$ 0.17	4・5<2, 4<1 3<1・5, 3<2
M [SD]	11.02 [2.51]	11.51 [2.92]	7.86 [3.01]	9.10 [2.34]	10.14 [2.97]		
肯定的解釈						W 31.36 *** $\eta^2$ 0.20	3<4・5<2, 3<4<1<2
M [SD]	10.06 [2.70]	11.53 [2.71]	7.36 [2.43]	8.64 [2.38]	9.29 [3.03]		
BMI						W 4.89 ** $\eta^2$ 0.04	4<1・5
M [SD]	20.34 [1.86]	20.08 [2.00]	20.38 [3.15]	19.32 [1.99]	20.69 [2.35]		
食事時母親						W 12.01 *** $\eta^2$ 0.09	2・5<3・1, 5<4
M [SD]	2.17 [0.68]	1.77 [0.72]	2.10 [0.73]	1.96 [0.64]	1.61 [0.65]		
体重不満足						3.91 ** $\eta^2$ 0.03	3・4<1
M [SD]	2.14 [0.77]	2.02 [0.87]	1.81 [0.75]	1.74 [0.84]	2.06 [0.83]		

\*\*\* $p<.001$  \*\* $p<.01$

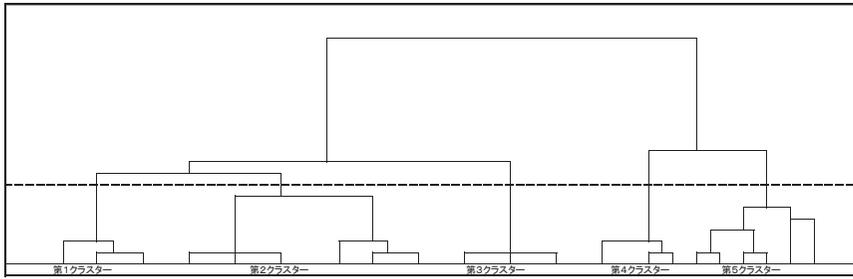


Figure1 デンドログラム

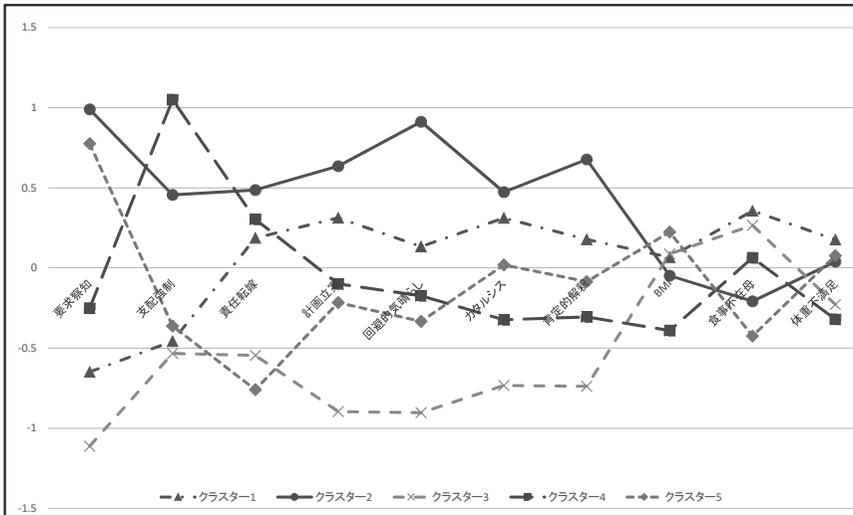


Figure2 各クラスターの尺度得点・BMIの平均値 (Z得点)

分散でない場合にはWelchの補正F値を求め、多重比較にGames-Howell法、等分散の場合にはTukey法を用いた。効果量は $\eta^2$ を算出した。その結果、全ての投入変数において主効果が有意であった (Table5)。効果量は、要求察知、支配強制、責任転嫁・放棄、計画立案・情報収集、回避的思考・気晴らし、カタルシス、肯定的解釈で、BMIと体重不満足度の効果量が小～中、食事時の母親の不在は効果量が中であつた。

続いてクラスターの特徴を明示するために、各投入変数を平均0、標準偏差1のZ得点に標準化した値を算出、図示した (Figure2)。クラスター1は、ストレスコーピングが平均よりやや高く、食事時の「母親の不在」「体重不満足」は最も高く、母親不在の傾向から「要求察知」得点も「支配強制」得点も低い。クラスター2は母親の「要求

察知」が最も高く、「支配強制」も2番目に高く、また5つのコーピング尺度得点が最も高かつた。中でも「回避的思考・気晴らし」と、「肯定的解釈」の得点が高い。BMIは平均に近く、「母親の不在」得点は2番目に低く、「体重不満足」は平均に近かつた。クラスター3は、母親の「要求察知」と「支配強制」得点どちらも最も低く、「責任転嫁」は2番目に低く、残りの4つのコーピング尺度も得点が一番低い。BMIは2番目に高く、「母親の食事不在」も2番目に高いが、「体重不満足」は低い。食事場面の母親イメージの得点自体が低く、BMIは平均的であつた。クラスター4は、母親の「要求察知」得点は平均的だが、「支配強制」が最も高く、食事場面での母親イメージが最もネガティブである。そして、コーピングの「責任転嫁」の得点が2番目に高く、「計画立案」「回避的

気晴らし」が平均に近く、それ以外のコーピング尺度得点は平均よりやや低目でBMIは最も低い。BMIの低さからか体重不満足度は最も低く、現状の体重に満足している。食事時の母親不在得点は平均的であった。クラスター5は、食事場面の母親の「要求察知」得点が2番目に高く、「支配強制」得点は低い。「責任転嫁・放棄」の得点が一番低く、「計画立案」「回避的気晴らし」の得点はクラスター4に近接し、それ以外のコーピング尺度の得点は平均に近かった。BMIは最も高く、母親の食事不在得点は最も低く、体重不満足度は得点が2番目に高かった。

②5つのクラスターによるEES尺度得点の平均値の差異と分布

5つのクラスターごとのEESの3尺度得点の平均値について、一要因分散分析を行った (Table6, 多重比較は全てTukey法)。すべての尺度で主効果が有意であった (動揺・恐怖 $F(4,460) = 4.99, p < .001$ ; 抑うつ $F(4,462) = 5.59, p < .001$ ; 怒り・

欲求不満 $F(4,462) = 6.27, p < .001$ )。効果量は、いずれも小～中程度であった。多重比較の結果、クラスター2、クラスター4およびクラスター1の平均値が、クラスター5ないし3より有意に高かった (クラスター1は有意傾向)。つまり、クラスター2、次いで4が過食傾向や気晴らし食いに繋がりやすい要素を持つことが示唆された。次に、EESの3尺度得点の上位25% (情緒的摂食傾向、すなわち気晴らし食いがあると考えられる対象者)、下位25%の範囲にある調査対象者が、どのクラスターに属しているのかを明らかにするために $\chi^2$ 乗検定を行った。その結果 (Table7)、「動揺・恐怖」の上位25%はクラスター2の該当率が有意に高く、低群はクラスター5の該当率が有意に高かった。「抑うつ」の上位25%はクラスター2への該当率が有意に高く、低群はクラスター3、5の該当率が高かった。「怒り・欲求不満」も高群はクラスター2の該当率が有意に高く、低群はクラスター5により多く該当していた。いずれもCramer's $V$ の値から、小～中程度の効果量であった。

Table6 クラスターごとのEESの平均値と標準偏差 (分散分析結果)

		クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	クラスター5	F値	Tukey法
								多重比較
動揺・恐怖	N	127	98	68	72	100	4.99 ***	5<2***
	M [SD]	16.37 [6.91]	18.49 [8.04]	15.35 [7.66]	17.21 [7.44]	14.15 [6.48]	$\eta^2$ 0.04	5<4 †
抑うつ	N	126	100	69	72	100	5.59 ***	5<2***, 3<2*
	M [SD]	17.41 [7.45]	18.74 [7.95]	15.57 [7.63]	17.07 [6.54]	14.34 [5.74]	$\eta^2$ 0.05	5<1*, 5<4 †
怒り・欲求不満	N	126	100	69	72	100	6.27 ***	5<2***, 3<2*
	M [SD]	15.65 [6.11]	17.66 [5.99]	14.65 [6.22]	15.93 [5.73]	13.62 [5.61]	$\eta^2$ 0.05	1<2 †, 5<4 †, 5<1 †

\*\*\* $p < .001$  \* $p < .05$  † $p < .10$

Table7  $\chi^2$ 検定結果とEES高群・低群の各クラスターに占める割合

		クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	クラスター5	$\chi^2$
							Cramer's $V$
動揺・恐怖	低群	27 (23.7)	15 (13.2)	22 (19.3)	15 (13.2)	35 (30.7) **	17.00**
	高群	32 (26.7)	34 (28.3) **	16 (13.3)	22 (18.3)	16 (13.3)	0.27
抑うつ	低群	27 (26.7)	14 (13.9)	21 (20.8) *	14 (13.9)	25 (24.8) **	17.03**
	高群	37 (29.1)	41 (32.3) **	14 (11.0)	20 (15.7)	15 (11.8)	0.27
怒り・欲求不満	低群	30 (25.2)	15 (12.6)	22 (18.5)	14 (11.8)	38 (31.9) **	19.21**
	高群	36 (28.3)	38 (29.9) **	18 (14.2)	18 (14.2)	17 (13.4)	0.28

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

## 4. 考察

### (1) EESおよびTAC-24の因子分析

EESについては、田中(2010)の因子分析の結果と比べると、因子数は先行研究と同様に3因子であり、また因子負荷量の高い項目もほぼ一致していた。国内での他の調査結果を踏まえなければ断定はできないが、EESは3因子構造であり、「不安」以外の「怒り・欲求不満」、「抑うつ」の2因子については、海外の研究と共通していると考えてよいのではないかと推測する。中国人を対象としたEESを用いた妥当性研究では、ポジティブ感情項目もオリジナルで追加しているため、比較検討を慎重にしなければならないが、因子分析の結果、「抑うつ」「不安」「怒り/敵意」「ポジティブ感情」の4因子が抽出されたという(Hong, Taisheng&Gui, 2013)。 $\alpha$ 係数は、中国人対象のデータでは0.85~0.86であり本研究の信頼性係数の方が高い。Taube-Shiff, et. al (2015)の研究は、Arnou&Kenardy, Agras (1995)の因子分析の結果に基づいた尺度のまま調査に使用しており、「怒り」 $\alpha = 0.92$ 、「不安」 $\alpha = 0.88$ 、「抑うつ」 $\alpha = 0.81$ であった。これも本研究の尺度の信頼性係数の方が数値的に高い。少なくとも本研究で用いた項目群では、内的整合性と因子解釈可能性からも、「不安」因子ではなく、「動揺・恐怖」因子とすることがより適切であると考えられる。Tanofsky-Kraff, et. al (2007)の子どもや青少年向けに改定したEES版の因子分析の結果では、feeling unsettled(「落ち着かない」)因子が抽出されているので、本研究の動揺や恐怖を示す感情の因子に近いと考えられる。翻訳の問題なのか、文化的な違いが背景にあるのか、今後さらなる検討が必要であろう。

TAC-24の因子分析結果は、神村(1995)、若林(2000)と同じ8因子構造にはならなかった。本研究では5因子が抽出され、第1因子から第3因子まで、第1軸と第2軸は共通しているが第3軸の「機能する反応系」の違い(認知か行動か)が一致していなかった。海老原ら(1995)の調査でも、6因子が抽出されており8因子構造ではないと報告されている。また、第3軸の認知と行動が分離し

ない結果になっているのも、本研究と共通している。そもそも若林(2000)のTAC-24の因子分析では、第8因子の「情報収集」と第2因子の「計画立案」の負荷量がいずれも0.40を超えていたことから、因子数が8より少ない構造になることが予想される。第3軸が分離しなかった理由は、ストレスに対する反応行動と認知が明確に区別できないこと、項目に含まれる行動と認知の記述は、問題の焦点化や問題の接近の仕方に含まれるからではないかと推測する。

### (2) 相関分析について

EESの「回避的思考・気晴らし」方略は、全ての変数で正の相関が見られたので、どの調査対象者もよく使用している方略であることも示唆された。因子負荷量の高い項目である「スポーツや旅行などを楽しむ」「友達とお酒を飲んだり好物を食べたりする」というのは、一般的な娯楽や余暇の過ごし方の類に入るためであるだろう。また、EESとの関連が推察されたのは、先行研究と同様に母親の「支配強制」尺度であった。

母親の「要求察知」がコーピングの「責任転嫁」と相関がなく、「カタルシス」と「肯定的解釈」とは正の相関があった。食事場面で子どもの要求を察知するという良き母親像が物事の悪い面ばかりではなく良い面を想起すること、話をして相手に理解してもらうこと、誰かに話すことで気持ちの安定を得ようとする対処能力を育てているのではないかと推測される。母親の「支配強制」の方は、「カタルシス」「肯定的解釈」とは無相関であり、「責任転嫁・放棄」とは正の相関があった。「責任転嫁」の負荷量の高い項目には、「口から出まかせを言って逃げだす」「自分では手に負えないと考え、放棄する」といった、反社会的で無力感が根底に存在している内容のものがある。食事場面での母親から子どもへのコミュニケーションが拘束的で叱責による緊張感に満ちている場合、子どもである女子青年は他罰的な心境に至りやすく、簡単に諦めへと傾く在り方になることが考えられる。

**(3) 各クラスターによる類型の性質と気晴らし食い**

分散分析や $\chi^2$ 検定の結果、クラスター2とクラスター4、クラスター1が、情緒的摂食、気晴らし食いに繋がりやすい特徴をもつグループであると推測された。特にクラスター2は、情緒的摂食行動と関連する特性を持っていることが示唆された。女子青年から見た母親イメージが、要求を察知してケアするイメージと支配的なイメージが共存する、非常に両面的で葛藤的なものであることが推測された。また「責任転嫁・放棄」といった他罰的な傾向が推測される一方、それ以外のコーピングはかなり頻繁に用いている様子から、自我の強さと社会適応の良さがうかがえる。

遠山・馬場(1991)は、母親の不安-支配的な過度に保護的になるかと思うと、一転して拒否的になる両面的な態度によって、過食症の人は、孤独感を持ちつつ対象との関係を維持しようとする基本的な構えを持っているという。母親との両面的な葛藤を残しながら、代償的に環境適応能力を獲得し、早すぎる自立への試みや適応の良さ(偽成熟)を呈するのである。過食症のクライアントの場合、拒食症のクライアントと違って抑うつ感や孤独感、無力感を自覚して自ら治療を求め、治療を開始すると、むしろ喋ること(よい患者化)を通して治療者に依存的にふるまい、順応しようとする傾向がある。クラスター2の「カタルシス」の高さは、そのような対象関係を反映しているのではないかと考えられる。きょうだい葛藤をベースにした不満感と共に、母親に対する強い依存感情を心理療法内で言語化する臨床事例もある(田中, 2002)。本研究では、過食症状には母親の養育態度は支配的である場合がきわめて多く、子どもはその支配的態度に内心不満を抱きつつも、依存関係を保ち続ける傾向があることと(下坂・塚原, 1991)、共通するものが見出された。非臨床群を対象とした調査だが、対象者の中でも気晴らし食いの中核的な特徴を持っているグループだったのではないかと考えられる。

クラスター4は、EES尺度得点の25%上位群が有意に多く該当していたわけではなかった。しかし分散分析の結果、クラスター5よりもEESの3尺度の平均値が高い傾向にあった。母親イメージが

支配的で最もネガティブだが、BMIの平均値が最も低く肥満傾向にないためか、体重に最も満足しているグループであることが推測される。以上から、母親を拒絶する心理が顕著で、摂食すること(取り入れ)を拒否する意味で、拒食傾向が併存するグループであったのではないかと推測する。このグループも、「責任転嫁・放棄」の得点が高いのも興味深い。そして「責任転嫁」以外のコーピング尺度の得点が平均より下回っていることから、他罰的になる一方で、ストレス状況の責任を自ら負わず、解決へ向けた努力や工夫をしない傾向がうかがえ、むしろ適応能力は低いタイプと考えられる。

クラスター1もEES尺度の上位25%群が期待値より多く該当していなかったが、分散分析の結果から「抑うつ」感情への対処のために食行動に走る傾向が示唆された。クラスター1のストレスコーピング得点は、クラスター2に次いで高かった。そのため、クラスター1に属する女子青年は比較的適応的であると言えるだろう。幼少期からの母子関係自体が希薄であることが推測されること、しかも現体重を最も満足していないグループであるので、これも過食症のクライアントに見られるような特徴を備えていると考えられる。

最も情緒的摂食(気晴らし食い)につながりにくいと考えられるのがクラスター5であった。クラスター5は最も母子関係が良好でかつ母親の存在を最も肯定的に受け止めており、「責任転嫁・放棄」の得点が最も低く、自暴自棄的な傾向が少ない性質を持っていると考えられる。クラスター3は、最も母子関係が希薄であり、なおかつ、コーピングには当てはまらないと考えており、体重への不満足感が低い傾向にあり、内的な問題やストレスの存在、ネガティブな情動を自覚し、認識すること自体が難しい、内省力が弱いタイプのグループではないかと推察する。

さらに、本研究では相関分析の結果から、「責任転嫁・放棄」というコーピングを用いることが、食行動の問題に最も重要な役割を持っている可能性が示唆された。そしてクラスター2で、「回避的気晴らし」得点が最も高かったことから、回避的コーピングの重要性が伺われた。こ

れは国内のTAC-24を用いている海老原ら（1995）の報告や、岡本・三宅・吉原（2013）の報告とは異なり、川人ら（2008）やMacneil, et. al（2012）、Freeman&Gil（2004）の結果に近かった。

川人ら（2008）は「肯定的解釈」の実行頻度の多さ、「放棄・諦め」コーピングの実行頻度の多さが、摂食障害傾向を促進すると述べている。本研究のクラスター4には該当しないが、クラスター2とクラスター1に見られる特徴でもある。そのため、「肯定的解釈」は一見適応的な側面を持つが、過剰に働けば現実認識の歪曲や否認を意味することを示唆しているのではないだろうか。松木（1997）が指摘している、摂食障害について、倒錯的な要素があること、直面すべき不安や苦痛そのものを取り扱おうとせず、刹那的快感によって苦痛や不安をごまかそうとして対象の誤用をすること、不安そのものを取り扱おうとせずに快感の状態を持続させようとするところから生じる否認であるとも考えられる。本研究では非臨床群を対象とした調査であるが、複数のコーピング方略や母子関係に焦点を当てることによって、臨床的エビデンスのいくらかを数量的に示すことが出来たように思われる。

## 5. 今後の課題

本研究は、TAS-24の評定を頻度から自己認識の評定に変えたことで、因子分析の結果が先行研究とは異なる因子構成になったが、情緒的摂食行動との関連が示唆された。臨床的見地に添うような結果とはなったものの、一人ひとりの回答者が直面しているストレスの内容や継続性、衝撃の大きさと、その認識が現実を歪曲した否認が働いているのか、比較的客観的であるのかの評価も不十分である。食事場面における母親のイメージも要求応答的な要素と、支配的で制御されるイメージの両方が存在していることの重要性が示唆されたが、今後はその葛藤的なイメージの形成過程を含め、依存性の質や家族機能の評価も入れた質的な研究方法を取り入れ、詳細に検討することが望ましいだろう。

## 引用文献

- Arnold, B., Kenardy, J., & Agras, W. S. (1995). The Emotional Eating Scale: The development of a measure to assess coping with negative affect by eating. *International Journal of Eating Disorders*, 18, 79-90.
- Bennett, D. A., & Cooper, C. L. (1999). Eating disturbance as a manifestation of the stress process: A review of the literature. *Stress Medicine*, 15, 167-182.
- Bruch, H. (1964). Psychological aspects of overeating and obesity. *Psychosomatics*, 5, 269-274.
- Bruch, H. (1978). *The Golden Cage : The Enigma of Anorexia nervosa*. Massachusetts. Harvard University Press. (岡部祥平・溝口純二（1979）思春期やせ症の謎—ゴールデンケージ—. 東京. 星和書店)
- Droter, D., Eckerle, D., Satola, J., & Wyatt, B. (1990). Maternal interaction behavior with non-organic failure-to thrive infants: a case comparison study. *Child Abuse & Neglect*, 14, 41-51.
- 海老原由香・神村栄一・坂野雄二（1995）. 摂食障害傾向におけるストレス対処方略について. 日本行動療法学会発表論文集, 21, 162-163.
- Folkman, S., & Lazarus, R. S. (1985). If it changes it must be a process: Study of emotion and coping during three stages of a college examination. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 150-170.
- Freeman, L. M., & Gil, G. M. (2004). Daily stress, coping, and dietary restraint in binge eating. *International Journal of Eating Disorders*, 36, 204-212.
- Garner, D. M., Olmstead, M. P., Bohr, Y., & Garfinkel, P. E. (1982). The Eating Attitudes Test : psychometric features and clinical correlates. *Psychological Medicine*, 12, 871-878.
- Garner, D. M., Olmstead, M. P., & Polovy, J. (1983). Developmental and validation of a multidimensional

- Eating Disorder Inventory for anorexia nervosa and bulimia. *International Journal of Eating Disorders*, 2, 15-34.
- Holahan, C. J., & Moos, R. H. (1987). Personal and contextual determinants of coping strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52 (5), 946-955.
- Hong, Z., Taisheng, A., & Gui, C. (2013). Validation of the Emotional Eating Scale among Chinese Undergratuater. *Social behavior and Personality*, 4 (1), 123-134.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸賀崎康子・坂野雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成. 筑波大学学校教育部 教育相談研究, 第33巻, 41-47.
- 川人潤子・堀 匡・大塚泰正 (2008). 女子大学生の神経性食欲不振症傾向と社会的スキルおよびコーピングとの関連. *心身医学*, 48 (11), 955-969.
- MacNeil, L., Esposito-Smythers, C., Mehlenbeck, R., & Weismoore, J. (2012). The effects of avoidance coping and coping self-efficacy on eating disorder attitudes and behaviors : a stress-diathesis model. *Eating Behaviors*, 13, 293-296.
- March, M., & Cohen, P. (1990). Early childhood eating behaviors and adolescent eating disorders. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 29, 112-117.
- Masheb, R. M., & Grilo, C. M. (2006). Emotional overeating and its associations with eating disorder psychopathology among overweight patients with binge eating disorder. *International Journal of Eating Disorders*, 39, 141-146.
- 松木邦裕 (1997). 摂食障害の治療技法 対象関係論からのアプローチ. 金剛出版.
- 岡本百合・中津完・河村隆弘 (2000). 摂食障害患者における感情状態とストレス対処行動：治療的介入との関係について. *心身医学*, 40 (5), 333-338.
- 岡本百合・三宅典恵・吉原正治 (2013). 大学生の摂食態度について—EAT-26の意味するもの—. *心身医学*, 53 (2), 157-164.
- Sulkowski, M. L., Dempsey, J., & Dempsey, A. G. (2011). Effects of stress and coping on binge eating in female college students. *Eating Behaviors*, 12, 188-191.
- Sanders, M., Patel, R., LeGrice, B., & Shephard. (1993). Childrer with persistent feeding difficulties: an observational analysis of the feeding interactions of problem and non problem eaters. *Health Psychology*, 12, 64-73.
- 下坂幸三・塚原美和子 (1991). プリミア・ネルヴォーザ治療覚書. 下坂幸三 (編). 過食の病理と治療. 金剛出版, pp. 153-196.
- 田中志帆 (2002). 自己主張するための過食—家族の中で存在を消していた自分から消さない自分へ—. 心理臨床学会第21回大会発表論文集, 183.
- 田中志帆 (2003). 食事場面での両親の行動が、思春期青年期の摂食障害傾向を規定する可能性. 群馬県立女子大学紀要第24号, 255-273.
- 田中志帆 (2010). 食事場面での母親の行動認識と、感情対処方略としての食行動が、摂食障害傾向に及ぼす影響. 青山学院女子短期大学紀要, 第64輯, 169-185.
- Tanofsky, M. B., Theim, K. R., Yanovski, S. Z., Bassett, A. M., Burns, N. P., Ranzenhofer, L. M., Glasofer, D. R., Yanovski, J. A. (2007). Validation of the emotional eating scale adapted for use in children and adolescents (EES-C). *International Journal of Eating Disorders*, 40, 232-240.
- Taube-Shiff, M., Exan, J.M., Tanaka, R., Wunk, S., Hawa, R., & Sockalingam, S. (2015). Attachment style and emotional eating in bariatric surgery candidates : The mediating role of difficulties in emotion regulation. *Eating Behaviors*, 18, 36-40.
- 遠山尚孝・馬場謙一 (1991). 過食の精神病理と精神力動. 下坂幸三 (編). 過食の病理と治療. 金剛出版, pp. 33-62.
- 若林明雄 (2000). 対処スタイルと日常生活および職務上のストレス対処方略の関係—現職教員による日常ストレスと学校ストレスへの対処からの検討—. *教育心理学研究*, 48 (2), 128-137.

## 謝辞

配布・回収をお手伝い下さいました青山学院女子短期大学の副手の皆様にお礼申し上げます。

## 注

- 1) Emotional eatingは気を紛らわせるための食行動、つまり「気晴らし食い」とも訳される。しかし本研究では「情緒的摂食」とする。
- 2) 田中（2010）では、EESを感情対処食行動尺度と表記している。教示には情緒ではなくて、感情という表現を用いることにした。その方が調査対象者には馴染みやすく、解りやすいと判断したためである。

---

### [抄録]

本研究では、女子短大生を対象に、18歳以前の食事場面における母子相互作用の認識と、ストレスコーピングが、情緒的摂食行動（気晴らし食い）と関連があるのかどうか検討した。分析の結果、情緒的摂食と女子青年の食事場面における支配・強制的な母親イメージ、一部のコーピング尺度と正の相関が認められた。続いてクラスター分析から、食卓における母親の不在傾向とBMIも含めた類型パターン抽出を試みた。その結果、5つのクラスターを抽出し、第2クラスターと第4クラスターが、気晴らし食いに関連することが示唆された。第2クラスターは、BMIは平均的な値だが、食事場面での母親イメージが両面的で、責任転嫁と回避的な気晴らしコーピングをとるタイプであると推測された。第4クラスターは、食事場面での支配・強制的な母親イメージが最も高く、責任転嫁をする傾向があり、BMIが最も低いタイプであった。以上から、青年期の過食傾における回避型、責任転嫁型のコーピングと、食事場面での両面的な母親イメージの重要性が示唆された。

---